

聞き書き史談ほか萬控え(四)

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の島)

独歩と元越山と文書順達路

(一)独歩と元越山

元越山は標高僅か五八一・五米と高さでは彦岳や尺間山には及ばないが、山頂からの眺望は良く、前面には豊後水道を隔て、遙か彼方に四国山地が望まれ、背後は佐伯市街を越えて遠く九重・阿蘇・祖母・傾の連山が霞んで見える。山頂には県下に八ヶ所しかない一等三角点の一つが設置されており、国土地理院の管理下のもと、国土測量の基準点として活用されている。

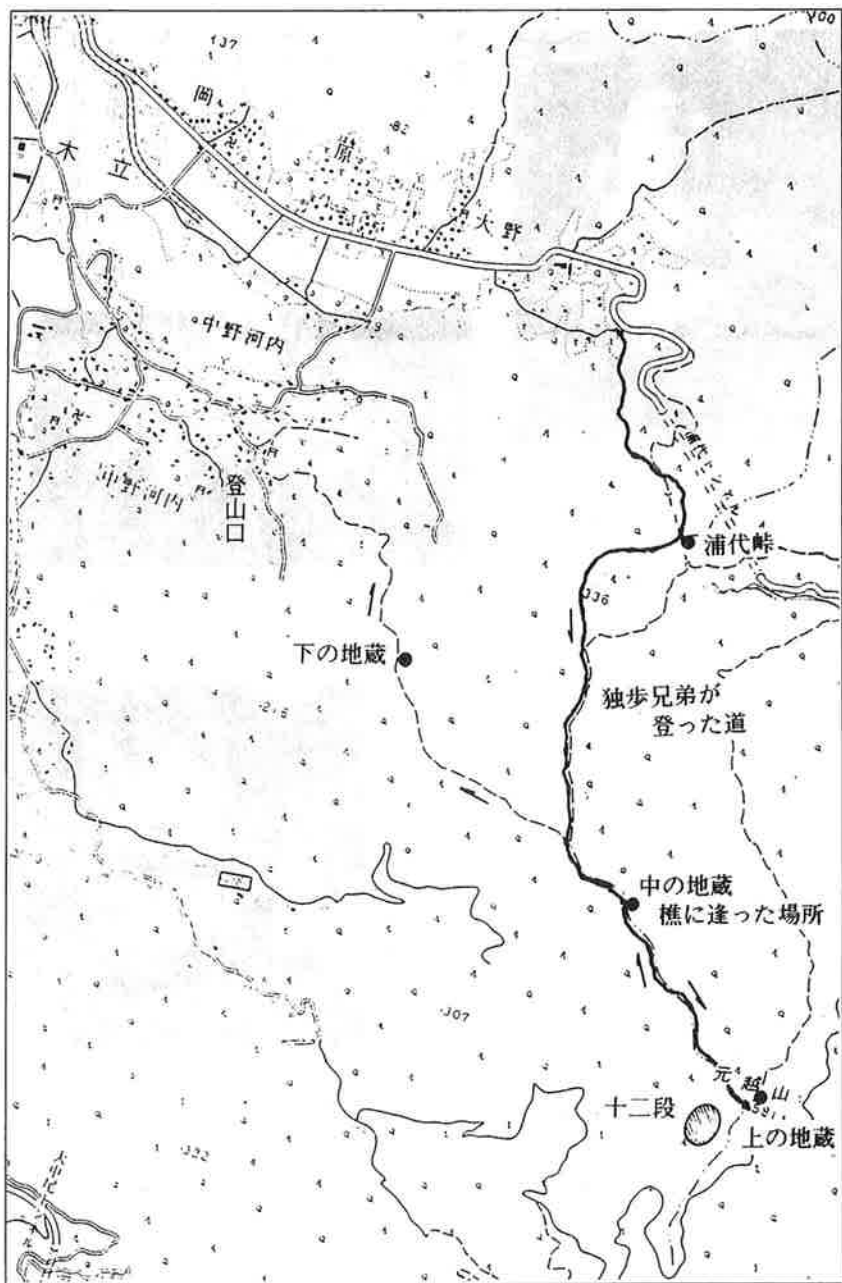
明治二十六年、二十二歳の時請われて佐伯に来た国木田独歩は、同年の十一月十一日弟收二と共にこの山に登った。二人は山頂からの景色の余りにも見事さに感泣して、その日記「欺かざるの記」に余すことなく書き留

めている。

この日二人は大野經由で浦代峠に登り、そこから山頂を目指した。当時浦代峠には茶店があつて主を宮川百藏と言ひ、生まれは浦代で機智に富んだ老人であつたといわれ、この時五十二、三歳、茶店で一人暮らしをしていた。独歩の日記によれば、茶店には婦人がいて彼女に道を問うたと書いているが、これはたまたま主の百藏が何かの用事で村に下りて留守のため、代わつて店番をしていたからではなからうか。茶店の跡は今なお浦代寄りに残つているという。

余談になるが峠に最初のトンネルが開通したのは、この時から十七年後の明治四十三年のことである。しかし、このトンネルは両坑口だけを巻き立て、中は素掘りの俣であつた。現在の新トンネルは昭和四十四年に開通した。

独歩兄弟が峠から元越山を目指して登つたという杣道は、木立と米水津の村境に当たる山の尾根であつたようだ。そうして途中から宮河内口からの登山道に出た。日記に出てくる石の地蔵はそこから三百米程登つた左側にある。今も一坪位の平地があつて小さな地蔵が祭られており、台石には弘化四年(一八四七)と刻んであるが人



名はない。この地藏はのちに小庄屋を勤めた目筈の又太郎という人が、仲間と一緒に運んだという言い伝えがある。傍らには日記にいう老松の切り株が朽ち果て、残っているが、その時の樵は誰だか分かっていない。

元越山の登山道には石地藏が四ヶ所祀られてい



下の地藏

る。一番下は登り口の右側にある。二番目は三合目位で「万人講世話人おいと・おきぬ」と刻ま



中の地藏 矢印は松の切り株



上の地藏

れているが年号はない。地元ではこれを下の地藏と呼んでいる。三番目が独歩の日記に出てくる地藏で中の地藏と呼び、六、七合目位にな

る。四番目上の地藏は山頂から北側に三、四〇米、直高にして一四、五米ほど斜面を下がった所にある。この地藏は頭部が欠けており文字は見当らない。しかし、此処が昔から色利越えの峠であったことに間違いはない。

さて、登り道では散々苦難の末頂上に達した独歩兄弟は、果てしなく続く四面の景観に驚嘆し、心ゆくまで自然を満喫して帰途についたが、何故か下山については一言も触れず（一六八号「元越山に登った独歩の帰り道」(武田剛会員 参照)、土井より送った船頭の身上に殊の外想いをめぐらし、こと細かに書き留めているのみである。

元越と独歩とゆかりのこねり柿

(二) 元越山と文書順達路

江戸時代は文書によって支配されていたと言われるが、「ものしり日本史」これはまた江戸時代における政治の特色でもあったという。我が佐伯藩でも同様の支配体制下にあったということは、残された藩政資料や庄屋文書など調べて見ればよく分かる。そこで、佐伯藩でこれまでに明らかとなった範囲の文書順達方法等について書くと、概ね次ぎのような順序になる。

(一) 藩庁や代官所から各村浦へ対し伝達されていた文書は、すべて総庄屋（吉野役所と言いまの大手町一丁目池彦附近にあった）に届けられていた。

(二) 総庄屋（吉野氏）はこれに回状する村浦の順序と添え書きを付して最初の大庄屋へ送った。

(三) これを受け取った各村浦の大庄屋は先ず写を取り、添え書きに署名捺印し、受領した日時と時刻等所要事項を記入して次村の大庄屋へ順達した。その際本書を汚したり加筆したりすることは固く禁じられていた。

こうした順送りによって領内を一巡し、最後の大庄屋から吉野役所へ返却するという仕組みになっていた。しかし、中にはその村にだけ或いは二、三ヶ村を対象とした回状もあったと思うが、藩政時代を通じその数は夥しいものであったろう。それ等が今も各地に残る庄屋文書である。

こうした支配体制下にあった村と村との間には、自ずから文書順達往來のための道が要る。木立は大庄屋方が中野河内（沖地区）にあった。そこは元越山の登山口から五百米位の所である。一方、米水津浦組は色利に大庄屋方があり、入津浦組は畑野浦にあった。したがって木立と色利を結ぶ最短距離は元越山を越えて行くのが最も近い。浦代に出て海岸伝いに行く方法もあるが、これは大分廻り道になるし海岸添いに道があったか定かでない。また、畑野浦へは入津（畑野浦）峠があり、



松浦へは松浦峠、吹浦へは吹越え峠、堅田・青山方面へは波越峠があった。

ただ江戸時代全期を通して九回行われたという歴代藩主の御郡廻りや、代官や奉行その他藩の役人が公用で往来する場合、木立から米水津への道は浦代峠を越えて舟で色利へ廻り、畑野浦へは入津坂を越えていたようであるから、元越道は木立と米水津を結ぶ文書の順達と、領民の往来にだけ供用されていたのではなかつたらうか。

さて、佐伯藩には村浦合わせて二七、八ヶ村（時代によつて違いがある）あつたというが、これ等村浦への文書順達はどのような経路で行われていたのか、研究不足でいまだ少し分らない。

そこで参考のため江戸時代に村と村を結んでいた峠道と、人馬往来のため供用されていたと思われるその他の小径まで、明治の地図と照合しながら書き抜いてみたら、（別表）他領に通ずるものも含めて七十四ヶ所の峠道があつた。これ等の中には文書順達往来のため通行していたと考えられるものも数多く、明治から昭和初期までは通学路として利用されていた峠道も随分ある。もつとも佐伯藩の領分は山に囲まれた上に前面はリアス式の海岸

線が入り組んでいるから、峠越えは避けられない地形ではあるが、住む者としては不便なことこの上なく、現代の道路網とは格段の差がある。

附記 地図は明治三十六年陸地測量部が調整したもので、これに載っている集落と集落を結ぶ小径を拾つて書き抜いたが、今の国土地理院発行の二万五千分の一図には載っていないものも多くあつた。これ等は永い間に未供用となつて忘れ去られたものと思うが、明治から大正頃までは大いに活用されていたのではなからうか。

なお、海岸部の集落と集落間には、海岸線と平行して山添いの高い位置に小径のあつたことが随所に見受けられるが、これ等の開削は比較的新しい時代のものであるかと思えられる。しかし、どれも峠道という程のものではないので、調査の対象から外した。

今回は地図による調査に止めたが、現地踏査などして厳密に行えば外されるものや、新たに加えねばならない小径も出てくるであらう。

前にも書いた御郡廻りでは、何れの場合も家臣を多く

従えての旅行であった。これ等旅行に際しては事前通達によつて、大きな峠には休息のために仮屋が建てられたというから、古くから交通の要所であったことに間違いない。今は道路網の整備と交通機関の発達によつて、昔の峠道など利用する者はいない。

元越山を南南西に三、四百米程下がった所に十二段という地名の開けた土地がある。附近一帯は勾配が至つて緩やかで面積も広く、元越山に最も近い所には湧き水もあり、古代人の住居跡地ではなかつたかなど、疑問を抱くような謎めいた土地でもある。享保の昔六代高慶公がこの附近から山裾にかけて、大掛りな狩りをしたという記録も残っている。

元越山、それは木立のシンボルであり母なる山でもある。

月に観て母を想うや元越山

表紙解説

柄鏡 (えかがみ)

鏡は、古代においては、祭器であり、また首長の権威のシンボルでもあった。

日本の鏡は、中国、朝鮮からもたらされた舶載鏡、それを模して造った仿製鏡、日本独特の和鏡とに分けられ、製作してから副葬品として埋納されるまで長く使用されていたものは、伝世鏡と呼ばれている。

柄鏡は、柄のついている金属鏡の一つで、西欧では古いが、中国では宗の時代から、日本では室町末期から用いられ、江戸時代に隆盛をみた、室町時代のもものは柄が長く、その先に穴があいているが、江戸時代には柄は広く短かくなつたとされる。

洋の東西を問わず、美しくありたい、見せたいと希う女性の心強い協力者として、常に身近に置かれた品の一つであろう。

写真の柄鏡は、津志河内の三股家に代々伝わるもので、直径二十四センチ、柄の長さ九センチ八ミリ、厚さ約三ミリで、松竹梅に鶴亀の絵が浮彫され相生の文字とともに天下一藤原義信作の銘が刻されている。

解説 吉田齊次郎

佐伯領内主要峠道調べ

所在地	名称	主たる接続地	峠の標高	摘要
佐伯市八幡	床木越	海崎中野～床木岩ノ下	150 ^m	※
〃	〃	海崎山ノ口～床木ノ瀬	280	
〃	門前越	海崎百枝～門前の奥	250	
〃鶴岡	〃	鶴望野口～門前佐土原	190	
〃	弥越坂	門前南～明治植松	60	※
〃	須平越	上岡檜野～切畑須平	30	※
〃上堅田	牛入道坂	池田下久部～長谷川原	70	◎別名ウイラ越
〃	大内・檜野越	上城元越～上岡檜野 稲垣大内	250	
〃	吹原峠	大越轟～赤木吹原	250	※
〃青山	轟峠	谷川三軒屋～蒲江浦 野々河内	340	※
〃	畑野浦越	谷川～神楽山～畑野浦	560	
〃下堅田	千人塚峠	西野～下大越	50	
〃	波越峠	波越～木立棧敷	290	
〃	小島越	長良津志河内～同小島	30	○
〃木立	畑野浦峠	大中尾～畑野浦	420	◎※別名入津坂峠
〃	元越山越	中野河内～色利浦 大内浦	560	
〃	浦代峠	大野～浦代浦	240	※
〃	松浦峠	大野奥～地松浦	230	
〃	吹越	大野吹越内～吹浦	220	
鶴見町	灘越	吹浦～大船繫	290	
〃	松浦越	吹浦～内河原～地松浦	160	
〃	桑野浦峠	地松浦 沖松浦～桑野浦	140	※
〃	浦代越	日野浦～浦代浦	250	
〃	間越越	丹賀浦～間越	250	
米水津村	小浦越	小浦～中越浦	200	◎
〃	松浦越	浦代浦～地松浦	270	
〃	尾浦坂峠	色利浦～畑野浦	460	◎
蒲江町	宮野浦越	尾浦～宮野浦	450	
〃	尾浦越	畑野浦～尾浦	370	
〃	楠元越	畑野浦～楠元浦	270	
〃	蒲江越	楠元浦～蒲江浦	370	
〃	西野浦越	竹野浦河内～西野浦	140	※

所在地	名称	主たる接続地	峠の 標高	摘要
蒲江町	黒熊峠	竹野浦河内～高山	170 ^m	○※
〃	猪串越	蒲江浦～猪串浦	180	
〃	野々河内	野々河内		
〃	小蒲江越	蒲江浦～小蒲江～猪串浦	90	※
〃	明石峠	丸市尾～北川町市内	420	延岡領へ
〃	張弓峠	丸市尾浦之迫～葛原浦	160	
〃	波当津越	葛原浦～波当津浦	200	
〃	陣ヶ峰越	波当津浦～北浦町 <small>歌糸市振</small>	400	※延岡領へ
直川村	黒沢峠	赤木道ノ内～黒沢	200	※
〃	杭の内越	黒沢～仁田原杭の内	240	
〃	陸地峠	赤木道ノ内～北川町陸地	520	延岡領へ
〃	大原峠	上直見内水～字目大原	230	※岡領へ
〃	堂師坂峠	赤木堂師～仁田原柚ノ木	200	○
〃	立ヶ峰	下直見上ノ口～下直見道越	60	○
〃	番ノ原越	下直見水口～小川番ノ原	330	
〃	小川越	上直見川又～小川岩屋	290	
〃	〃	上直見羽木～小川岩屋	280	
〃	横川越	上直見羽木～横川月形	120	※
〃	板ヶ尾峠	横川竹ノ脇 <small>岡</small> ～因尾上津川	410	○
〃	見明峠	横川大石～字目見明	240	※岡領へ
本匠村	小野市越	上津川～小野市神田	300	※岡領へ
〃	上津小野越	榎峰～字目上津小野	480	※岡領へ
〃	内山越	榎峰～三重内山	500	※白杵領へ
〃	〃	新開～	450	※白杵領へ
〃	腰越峠	上腰越～野津白岩	470	※白杵領へ
〃	楯ヶ城山越	羽木原～野津中野	609	白杵領へ
〃	横川越	板屋～横川竹ノ脇	400	
〃	上直見越	井ノ上楠木～横川月形・上直見羽木・小川岩屋	460	
〃	冠岳峠	宇津々山口～野津垣河内	540	白杵領へ
〃	三股越	小川荳ノ木～下三股	260	
〃	新洞越	小川荳ノ木～下直見新洞	280	
〃	尾岩越	笠掛～切畑尾岩	120	○
〃	切畑越	笠掛～切畑石打 <small>江良</small>	240	
弥生町	簾山峠	石打～下直見	70	○※

所在地	名称	主たる接続地	峠の 標高	摘要
弥生町	細田越	深田～細田	50	※
〃	尺間越	上小倉山田内 山梨子谷口～尺間岡	400	
〃	中ノ谷峠	宇藤木～野津川登	270	白杵領へ
〃	竹ノ越峠	床木杓切～津久見彦ノ内	380	
〃	鏡峠	床木杓切～津久見鍛冶屋	450	○
津久見市	千怒越	久保～千怒	190	○
〃	日見峠	千怒～日見	160	
〃	浅海井越	千怒～上浦浅海井	360	
〃	津井峠	網代～〃津井	140	○

調査方法

- 1) 調査は明治38年陸地測量部発行の5万分の1図と、各市町村発行の2万5千分の1図(地理調査院調整)を照合しながら、路線の位置は前図に従い標高は後図に拠った。
- 2) 名称は一般的な呼び方に拠ったが、不明なものが多い。そこでそれ等の峠については、通過地点名を適宜採用した。
- 3) 標高の数値は等高線(10m単位)より読み取ったものである。したがって端数は表示できないので確定的なものではない。
- 4) ◎印は天保10年御郡廻りの時仮屋が建てられていた峠、○印は休息または通過した峠、※印は明治以降一部改良若しくは別ルート建設によって、今は公道により通行出来るもの。
- 5) 標高別内訳表(但し他領へ続く峠道は除く)

標高 0～100m	9ヶ所
100～200〃	16〃
200～300〃	19〃
300～400〃	9〃
400～500〃	6〃
500m以上	2〃
計	61〃

(註) 蒲戸・鶴見両半島では尾根伝いに突端まで小径が通じ、途中から各集落と結んでいた所が多い。